

二〇〇七年度大学入試センター試験 解説〈現代文〉

第1問 評論文 山本健吉「日本の庭について」

〔総括〕

著者の山本健吉は、文芸評論家。一九八八年の共通一次試験本試験で一度出題されたことがある。現代俳句への造詣が深く、日本古典文学に関しての評論も多い。

今回出題された文章は、「庭園」を題材として日本と西洋との対比を論じた芸術論。テーマとしてはオーソドックスなものだが、本文の長さが昨年度より約五割増しと長文化し、速読力が求められた。

問1の漢字が昨年よりやや難しくなった。また、問3の「一期の出会い」に絡む設問や、問4の志賀直哉の主張を読み取る問題などは設問の意図を汲んで解答する必要がある、やや難しかったが、全体では標準的なレベルといえる。

〔解説〕

問1 漢字問題

どれも大学入試で出題頻度の高い漢字なので、日ごろから漢字の勉強をきちんとしている人は満点がとれたはずだ。(エ)のように一つの漢字を訓と音の両面から問う問題はセンターでは頻出なので、日ごろから多角的な漢字の勉強を心がけてほしい。

(ア)	祈念	①	祈願	②	棄権	③	騎馬	④	旗手	⑤	軌道
(イ)	記念碑	①	被害	②	卑近	③	罷免	④	碑文	⑤	疲弊
(ウ)	征服	①	犠牲	②	調整	③	先制	④	一斉	⑤	遠征
(エ)	朽ち	①	究明	②	及第	③	階級	④	紛糾	⑤	不朽
(オ)	媒介	①	栽培	②	賠償	③	触媒	④	陪審	⑤	倍加
正解	(ア)	①	(イ)	④	(ウ)	⑤	(エ)	⑤	(オ)	③	

問2 基本

傍線部A「造型し構成し変容せしめよう」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

日本とヨーロッパの芸術観を対比的に説明している箇所、傍線部は「ヨーロッパ流の芸術観」の説明になっていることをつかむことが大前提。

傍線部Aの直前が「しだから」となっており、直前との関係が「因果関係」であることに気が付けば容易に正解にたどり着ける。つまり、傍線部の直前に、「ヨーロッパ流の芸術観では、芸術とは自然を素材にして、それに人工を加えることで完成に達せしめられた永遠的存在なのだから」とあるのが原因。

その原因部分をきちんと踏まえている選択肢は②で、これが正解。

①の「一瞬の生命の示現」では、「永遠的存在」の反対なので×。③は全体的に日本の芸術観といえるもので×。④も「変化こそ自然の本質だ」というのは日本の芸術観で×。⑤は「芸術家たちの造型意志」はいいとしても、「自然の素材の変化を生かしつつ」以下が、本文に書かれている内容と合わないで×。

正解 ②

問3 難

傍線部B「造型ではなく、花の命を惜しむことが、生花の極意である」とあるが、筆者は、この生花に続けて、茶の湯、連句の例を挙げている。それは「一期の出会い」を踏まえた上で、日本の芸術のどのような点を強調するためか。その説明として最も適当なものを選べ。

実際の問題冊子では三行もあった設問の意図をしっかりとつかまないと正解するのは難しい問題。ここで問われているのは、「一期の出会い」を踏まえた上での「日本の芸術の特色」なので、その説明として正しいものを選ぶ。

ここまでの本文の流れは、日本の芸術と西洋の芸術との対比であり、傍線部Aは西洋の芸術観の説明が求められたものだった。それに対して傍線部Bは日本の芸術の特色について問われている。

ここで筆者が「一期の出会い」と言い、生花や茶の湯や連句の例を挙げているのはなぜか？

それは、日本の芸術は「造型意志が極端に弱い」ということを説明するために書かれていることをつかむのがポイントだ。また、「一期一会」の説明としては、芭蕉の例のところに「自己」を没却し、自然のままに随順し、仲間と楽しみを一つにする」ことが「一期一会の歓び」であると書かれているをつかむ。

文章の構造としては、まず頭でわかりにくい抽象的な主張をしたあと、具体例を出してそれをわかりやすく説明し、最後にまとめがあるという形をとっている。次のような形だ。

A 抽象的主張Ⅱ日本の芸術は造型意志が弱い

具体例（傍線部Bはこの部分にある）

A' 抽象的主張Ⅱ自己を没却し、自然のままに随順し、仲間と楽しみを一つにする

傍線部Bの説明として必要なものはAⅡA'であり、この内容を含むのは、「芸術における個の表現意識の弱さ」「仲間で作り合う」と説明している④のみなので、これが正解。他の選択肢では、そうした「自己（⇕仲間）」「造型意志の弱さ」についての言及がないので×。

「一期の出会い」という語句の意味に引つ張られて、③の「刹那性」を選ばないこと。ここではあくまで「個と造型意志の弱さ」が日本の芸術の特色であることを述べているのを読み落とさないことだ。

正解 ④

問4 標準

傍線部C「この庭の絶賛者の一人に志賀直哉氏がある」とあるが、志賀が絶賛したのはなぜだと筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを選ぶ。

日本の芸術を説明するにあたり、傍線部Cの箇所は「庭園」を題材として考察に入っている箇所ので、「この庭」というのは「龍安寺の石庭」のこと。

ここでのポイントは、筆者の山本健吉が志賀直哉の意見に対して疑問を呈していることをつかむことだろう。また、問3までの西洋と日本の芸術観の違いを押さえておくことが読解上のポイントになる。

筆者の考える日本の芸術は、問3でみたように「個人の表現意識が弱く、それに伴って造型意志が弱い」というのが特色であった。ところが、日本の庭の代表のように言われている「龍安寺の石庭」に関して、筆者は「果たして日本の庭を代表する傑作なのか」と疑問を呈している。

そして、志賀直哉が絶賛した理由として、「永遠不変のキネンヒ的な造型物を志向するヨーロッパ流の芸術理念の上に、飽くまでも作者の個の表現としての作品を重んずる近代風の考えが重なっているのではなからうか」と結論付けている。選択肢をみていくと、こうした「造型意志」と「作者の個の

表現」について説明してあるものは⑤しかなく、これが正解。

残りの選択肢を消去法で消していくと、①は「精巧な模倣」、②は「日本の芸術理念とヨーロッパの芸術理念との幸福な出会い」、③は「かえって」以下の内容、④は「一期一会の歓びにすべてをかける」がそれぞれ×にあたる。

正解 ⑤

問5 基本

傍線部D「この非日常性は例外と言うべきである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

センター現代文で頻出の「指示語問題」。

傍線部の冒頭に「この」という指示語があるように、ここでの「非日常性」とは、直前の内容を指している。引用されている志賀直哉の言葉の直前の「あまりに息づまるような、窮屈きわまる庭」「日本の多くの庭の、人の気持をくつろがせ、ここにはない」の箇所である。

選択肢では、③が過不足なく指示語で指し示された内容を置き換えていて正解。日本の多くの庭が「人をくつろがせるものである」のに対して、龍安寺の石庭は「緊張感をもって見ることを強いる」という関係をつかむ。

この問題に関しては、「指示語問題」という視点が大切なので、指示語の指し示す内容を含んでいない選択肢は×になる。正解の③以外は指示語の指し示す内容を含んでいない。

正解 ③

問6 基本

本文は、空白行（6ページ）によって前後に分けられているが、本文の内容や展開の説明として最も適当なものを選べ。

昨年度の間6も「論の進め方」が問われたが、今年も同様に「本文の内容や展開の説明」を求める問題になっている。二〇〇五年までは、評論文の最後の問題は「内容一致」が主であったので、新課程になってからは二年連続して論の進め方・本文の展開、といったものに焦点が当てられている。難易度としては、それまでの内容一致よりも易しく、選択肢の長さも昨年よりも短くなっているので解答しやすかったはずだ。

こうした内容一致や論の進め方の問題は、基本的に選択肢を比較して消去していく形で解いていく。

①は、「後半では一転して」以下が間違い。「龍安寺の石庭を代表とする日本の庭」とあるが、筆者は龍安寺の石庭は日本の庭の中では例外だと結論

付けている。

②は、前半の説明はまったく問題がなく○。後半に関しても①と対照的に「龍安寺の石庭は日本の庭の例外として位置づけられる」としており○K。これが正解。

③は、「後半では両者の芸術理念の共通点に普遍性を認めつつ」以下の説明が×。①同様、龍安寺の石庭に対する筆者の意見を完全に取り違えている。

④も龍安寺の石庭のとらえ方が間違っているので×。

⑤は、前半部分の「抽象的」が×。さらに、前半と後半で対比されている内容についても間違っている。

正解 ②

第2問 小説文 堀江敏幸「送り火」

〔総括〕

二年連続して現代作家からの出題で、著者の堀江敏幸は『熊の敷石』で芥川賞を受賞した小説家。フランス文学者でもあり、現在は明治大学理工学部教授。今回の内容はやや受験生にとって読み取りにくいものだけに、間違って読み取ると大きく失点してしまう可能性がある。また、文章量が多く、解くのに時間がかかった人も多かったのではないかな。

例年出題される問1の語句問題は、今年も辞書的な意味を知っていないと文脈判断だけでは間違える可能性が高い。問2以降は、主人公を中心とした心情の変化と人物関係を問うものであり、設問形式自体は例年通りだが、本文に直接的な根拠のない問題がいくつかあり、やや難易度の高いものであった。また、問6の表現の特徴問題を二つとも正解するには、注意深く選択肢を読む必要がある。全体的には昨年よりやや難化したといえる。

〔解説〕

問1 語句問題

語句は三つとも慣用表現で、「本文中における意味」を問う問題ではあるが、あくまで「辞書的な意味を優先して解く」というのは例年通りの鉄則パターン。

その意味で、(ア)の「老成した」は迷う問題。文脈判断だと正解の③ではなく、他の選択肢を選んでしまう可能性があるが、あくまで辞書的な意味は「年

のわりに落ち着いた」なので、正解は③。陽平の年齢が四十代後半であると書かれているのも迷う材料になっている。

(イ)の「不意をつかれて」は文脈的にも辞書的にも⑤の「思いがけないことにびっくりして」が正解。

(ウ)の「教室の体裁をなし」は、①がひっかけだが、これも辞書的な意味を優先して、正解は⑤「教室らしい様子になって」。

正解 (ア) ③ (イ) ⑤ (ウ) ⑤

問2 標準

傍線部A「まわりを拒んだりはいしなくても、ひとりだけべつの時間を生きているような雰囲気を持っている」とあるが、「絹代さん」は「陽平さん」をどのような人物としてとらえているか。その説明として最も適当なものを選び。

この問題を解くには、まず選択肢にある四字熟語の意味を知っていることが前提になる。

①の「泰然自若」は「落ち着いて物事に動じない様子」、②の「無為自然」は老荘思想の基本的立場を表した語で、「人為的な行為を排して、自然のままであること」、③の「謹厳実直」は「きわめてまじめなこと」、④の「闊達自在」は「心が大きく、小さな物事にこだわらず自由なさま」、⑤の「直情径行」は、「思ったことを隠さず、そのまま言ったりしったりすること」。

このうち、傍線部の「まわりを拒んだりはいしなくても、ひとりだけべつの時間を生きているような雰囲気」と食い違ったり、合致しないものは、③・④・⑤の三つ。特に⑤はまさに「反対の性格と言える。また③は、「爽やかで」とあるところも、問1の(ア)でみた「老成した」の意味からして×になる。残った①と②だが、陽平が②の「隠遁者」ならば、世俗を逃れ隠れて住むことになるのだが、ここでは書道教室を開こうという人物なので隠遁者とは言えず、×。正解は残った①になる。

正解 ①

問3 基本

傍線部B「絹代さんにはなぜかそれがとても嬉しかった」とあるが、この部分を含む子どもたちとのやりとりを通してうかがえる「絹代さん」の心情とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを選び。

この問題はまず、傍線部中の指示語を正確にたどることが大切で、「それ」が何を指しているかをとらえる。

「それ」が指しているのは、絹代の「泣くふり」に対して、子どもたちが逆に喜んで「ぜったいにおねえちゃんとは呼んでくれない」という部分。では、

問4 やや難

なぜそうした子どもたちの反応が嬉しいかと言えば、「なんだか親類の家に遊びに来ているような雰囲気なのだ」とあるように、他人の子どもたちなのに、家族や親類のような親密さを感じるからだとわかる。つまり、絹代にとって子どもたちは、家族同様の関係に思えるのだ。

選択肢では、そうした家族的な親密さを感じて嬉しく思っているという内容のものは④のみで、これが正解。また、④の「父親の死後、母親とふたりきりで寂しく暮らしていたが」の部分も事実関係を過不足なく押さえている。

①の「仲間意識」は近いようでいて家族意識とは違うので×。②の「保護者になったように」では、どういう意味なのかはつきりしないので×。正解の④にあるように「親密さ」などの語がないのが致命的。③の「陽平さんに近づいたような気がした」は、この段階では無関係で的外れ。⑤は指示語の内容がとらえられていない。また、「静か」⇕「活気」の問題ではないので×。

正解 ④

傍線部C「とりわけ絹代さんを惹きつけたのは、教室ぜんたいに染みいりはじめた独特の匂いだった」とあるが、「絹代さん」が匂いに惹きつけられたのはなぜか。その理由として最も適当なものを選べ。

「匂い」に惹きつけられた理由については、傍線部のあとに展開していく中で明らかにされる。小説ではよくある形だが、ある象徴的な事件・事物や環境変化などをきっかけにして、時間が過去にフィードバックして回想に入っていくシーン。今回はそのキーワードが「墨の匂い」であった。

絹代の記憶が過去に引き戻されることで回想されるシーンは、かつてこの家で行われていた養蚕ようさんであり、それは「絹代」という名前とも関係のあるものだった。そして、名付け親である祖父母や「同居していた息子夫婦」など「家族」とのなつかしい思い出へと変化していく。問3同様に「家族」がキーワードになっている。また、「絹代」という名前の由来とのからみも要素としては必要だ。

選択肢をみるとその二つの要素を満たしているのは②であり、これが正解。

①は「子どもたちと一緒にいる楽しい時間と重なって」の部分が×。③では単に蚕のことを思い出したに過ぎず×。④は全体的に×。陽平はここでは無関係。⑤はちよつと迷うが、正解の②と比べてみると、名前からかむ要素がなく、また一番大切な「家族」についての言及がないので×。

正解 ②

問5 やや難

傍線部D「有名な女優さんとおなじだねえと大人たちからいくら褒められても嬉しくなかった名前を、陽平さんは、あたたかい、人肌に触れるために生まれてきためらかな布地に、一瞬で変えてくれたのである」とあるが、ここに至るまでの「絹代さん」の心の動きはどのようなものと考えられるか。その説明として最も適当なものを選べ。

文章全体の最後の部分に長い傍線が引かれており、それに対応するように選択肢の文も長い。本文に確実な根拠がない問題なので、選択肢をかなり丁寧に比較して落としていかないと正解できない。

まず、直前の「頬が少しほてった」に表されている絹代の気持ちは、陽平が示した愛情表現に対するものだと思われる。ただし、これをどこまで踏み込んで解釈するかに関しては本文中に根拠がないといっている。

⑤のように「愛情を受け入れよう」と決心している「レベルなのか、それとも②や④のように「一緒に生きていこう」とまで考えていると判断しているのかで迷う。一方、③のように、「これまでの人生を肯定的に受け入れることができる」という結論になっているのは×。また、①のように「温かい気持ち」「レベルでは絹代の陽平に対する愛情の説明としては不足している上に、原因として「名前の意味を教えてください」とあるところが×。これはすでに絹代にはわかってのことだと推測されるので、ここでの原因にはならない。

残った中では、④は書き初めに託された陽平の絹代への愛情表現の言及がなく×。⑤は名前の意味を肯定的に受け止めたところがあるが、その原因が「陽平の書き初め」になっていないところが致命的ミスで×。②にあるように、書き初めに託された陽平の愛情表現こそが絹代のこれまでの考え方を一変させたのである。この選択肢⑤は要素的には正解の②に近いのでかなり迷うが、結論に至る原因部分の違いをしっかりとつかんでほしい。

②は、「自分のことも肯定的に受け止められるようになり」とある部分が本文にはなく、また「一緒に生きていこうと考えている」は言い過ぎではないかと考えて落としてしまった人がいると思う。しかし、他の選択肢が致命的なミスを持っているのに比べると、以上の点は△程度なので②が正解となる。

正解 ②

問6 標準

この文章における表現の特徴について説明したものとして適当なものを次のうちから二つ選べ。

小説問題の最後の「表現の特徴」について問う問題は、選択肢を要素に分けて消去していくのが確実な解法だ。

①は「特異な感性」と呼ぶほどのものではないので×。

②は「感覚に訴える表現が多用される」「絹代さんの実感」の部分が要検討だが、特に間違いとはいえない。

③は「かぎ括弧を用い」ないことで「現実感が生み出され」という因果関係はなく、それによって「人物が生き生きと描き出されている」と結論付けるのは無理があり×。

④は「回想の形で語られる中に現在形の表現が挿入されることによって臨場感が強められ」とあるが、表現上そうした効果は認められない。また、「登場人物の心理状態と行動との結びつきが明示されている」というわけでもないで×。

⑤は全体的に陽平の人物像を浮かび上がらせる効果のある例が説明されており、問題ない。

⑥は「平仮名書きが多用される」ことで「大人の世界に子どもの視点が導入されるのはいいとしても、「物語が重層的に語られている」わけではなく、あくまでも主人公の絹代が中心となっているので×。

正解 ②・⑤

二〇〇七年度大学入試センター試験 解説〈古典〉

第3問 古文 『兵部卿物語』

〔通釈〕

こうして（時間が）過ぎて行くうちに、（兵部卿の宮の）お気持ち（右大臣の姫君に）傾くというわけではないけれど、自然と心が慰む面もあったのだろうか、昼なども折り折りに（右大臣の姫君のもとに）おいでになって、碁を打ち、偏継ぎなど、さまざまな御遊びなどをなさるので、按察使の君は兵部卿の宮のお姿をつくづくと見るにつけても、あの夜な夜なの月光のもとで、はつきりとはしないながらも（愛おしく）見た人と食い違ふところがないので、「世の中にはこれほどまでに（私のもとへ）通って来ていた方に似ている人もいるものなのであろうか」と思うが、見慣れるにつれて、ものをおっしゃる声、たずまい、容姿、全てがその（自分のもとへ通って来ていた）人であるので、あまりに一人だけで悩んでいても気がかりなので、侍従にこうこうであると語りなされると、「やはりそうですか、私にもたいそう不思議に思われることが数々ございます。あの（中将様に）度々御供として御仕えしていた蔵人とか言っていた人が、ここにおりまして、格別に『宮の御乳母子である』と言って、（周囲の）人も並一通りでなく思っている様子である。昨日も（右大臣の姫君の夫である宮様が）宮中へ参上なさるということで、（この邸から）お出かけになられるのを見ますと、（中将様にあなた様の）度々の御手紙を持って行った御隨身も、（こちらのお屋敷で）『御前駆追ひする』と言って忙しそうな様子でおりましたのは、あの中将は仮のお名前で、（本当は）宮でいらっしゃったのだろうか」と（言う）。

（それを聞いて按察使の君は）ますます気がひけて心がいたんで、「もしそうならば見つけられ申し上げたような時に、どうしよう。（姿を消したあとの私の）行方ははつきりとは聞かれることもないだろうと思ったのに、このような様子で（姿を）お見せ申し上げるようなことは、たいそう恥ずかしいことでも（あるだろう）」と、今更につらいので、宮がいらつしやる時はうまくそとその場を退きながら（自分の姿を）見せ申し上げまいと抵抗するが、「（そういう私の態度を周囲の）人もどういうことであろうかと見とがめるであろうか」と、そのことも悩ましく、「どうであれ悩みが絶えない我が身であるなあ」と思うと、こういう場合にはありがちなように、涙が真っ先にこぼれてしまう。

ある日の昼頃、（あたりは）たいそう物静かで、「宮も今朝から宮中にお出かけになってしまった」と言って、人々は、（右大臣の姫君の）御前でくつろぎながら、遊び興じていらつしやる。姫君は物に寄りかかってうつむきかげんで、御習字、絵などを遊び半分に書きなされて、按察使の君にもその同じ紙に（字や絵を）書かせなさる。（右大臣の姫君は）さまざまな絵などを描き遊んでいた中に、垣根に菊などをお書きになって、「これはひどく下手だわね」とおっしゃっ

て、持っていらつした筆で墨をたいそう濃くお塗りになるので、按察使の君が、輝くような美しさでちょっとお笑いになって、その傍らに、初霜もまだ降りきらないというのに、どうして白菊は早くも色変わりした色を見せているのだろうか
と、たいそう小さく書き付けますと、姫君も微笑みなさりながら（これを）御覧になる。

ちょうどその時、兵部卿の宮が音も立てずに（部屋に）お入りになるので、御硯などを片付けることができるひまさえなく、（女房たちは）皆退出したが、姫君も（たわいもない遊びに興じていたのを）紛らわそうと扇を手探りしつつ物に寄りかかって座っていらつしやる。按察使の君は、他の人よりも特にたいそう困って、御几帳の後ろから退出したが、（兵部卿の宮は）どうお思いになったのだろう、しばらく眺めていらつしやって、あの行方が分からなくなってしまうた人のことを、ふと思ひ出しなすっては恋しく思われてならないので、（恋人との）かつての出来事の数々を繰り返し思い出しなすりつつ物に寄りかかってうつむきかげんになられると、御硯の入った箱のふたが開いていたので、（兵部卿の宮が）それを引き寄せなさり、以前に書いた御習字の（紙の陰の）、硯の下からのぞいている紙を手にとって御覧になるので、姫君はたいそう恥ずかしく思つて顔を赤らめて、横を向きなさる様子は、実上品で、輝くような美しさである。

兵部卿の宮がつくづく（この紙を）御覧になると、白菊の歌を書き付けているその筆跡は、たった今思ひ出しなすっていた人が、（かつて姿を消す前に）「草の庵」と書き残した筆跡と紛れようもなく同じであるので、（そのことが）たいそう気がかりで、「さまざまにいろいろ書きましたねえ。（この筆跡は）誰であろう」などと、何げないふりでお尋ねになるけれど、（右大臣の姫君は）ちょっと横を向いていらつしやるので、（兵部卿の宮が）幼い少女で御前に控えておりました者に、「この絵は誰が描いたのか。もしありのままに言ったなら、たいそうおもしろく私も描いてみせてやろう」とだましなると、（その少女は）「この菊は姫御前がお描きになりました。『ひどく下手だ』とおっしゃって（墨で）書き消しなさるので、困って、按察使の君が、この歌を書き添えなされたのです」と語り申し上げるので、右大臣の姫君は「（この少女は配慮もなく）たいそう差し出がましいことをした」とお思いになって、（たわいもない遊びの子細を兵部卿の宮に知られてしまったことを）恥ずかしそうにしていらつしやる。

【解説】

問1

(ア) 「おろかならず／思ふ／さま／なり」と単語分けされる。「おろかなり」は「おろそかだ・いいかげんだ」などと訳す必修単語。「愚かだ」の意にならなくもないが、それならば問われることはないだろうから、その点から見ても正解が①である可能性は少ない。②や⑤で示されている意味は「おろかなり」の意ではないから、これらも正解にはならない。③では「おろかなり」の意は表されているものの、打消の助動詞「ず」の意味が無視されていて正しくない。④は「並一通りでなく」が「いいかげんでない」と同意で、「おろかならず」の意として正しいので、これが正解となる。

(イ) 「いと／よし／よく／にほひやかなり」と単語分けされる。「よし／よく」は、形容詞「由々し^{よしよし}」の連用形。「よし／よく」の形で覚えた者は少ないだろうが、必修単語「よしあり」と同意であるだろうと気がつけば、①「風情があり」・③「上品で」・⑤「奥ゆかしく」などが良さそうであると考えられるだろう。また、「にほひやかなり」は、名詞「にほひ」で覚えた者が多いと思われるが、「にほひ」とは「はなやかで照り映えるような美しさ」のことであるから、「にほひやかなり」も同意を表す形容動詞であろうと推測することができ、これに気がつけば、正解は③しかないことになる。

(ウ) 「うちそばみ／おはする」と単語分けされる。「うち」は動詞に付く接頭語。特に訳さなくて良いことが多いが、強いて訳す場合は「ちよつと」と訳すことが多い。また、「そばみ」は四段動詞「側む」の連用形。必修とはいえないが、漢字を当てはめて考えれば意味は明らかであるし、ここで右大臣の姫君が「横を向いて」いることは、傍線部(イ)の直前に「傍らそむき」とあることからわかり、正解は②となる。ちなみに「そばむ」は「そば向く」でも同じことであり、これは音の面から見ても「そむく」に近い。

問2 文法の学習をしていれば、「に・なり・なむ」の識別は必修であるので、たやすく解けるはずの問題である。

まず、aを含む「にや」であるが、これは直後に「ある・あらむ」などの係り結びの結びの省略があることで知られるパターンである。一方、独立している「に」で、直後に存在を示す意味を持つ動詞（あり・侍り・おはす等）があるものは、断定の助動詞「なり」の連用形であることが多いので、aは断定の助動詞「なり」の連用形であることになり、これを正しく判断できれば、正解候補は④と⑤の二つだけに絞られることになる。

次に、「にき・にけり」のように直後に過去の助動詞（き・けり）を伴って使われている「に」は、ほぼ完了の助動詞「ぬ」の連用形であると考えてよいが、cを含む「にし」は「にき」の「き」が連体形「し」になっている状態であるので、cは完了の助動詞「ぬ」の連用形であることになる。よって、aとcが分かると正解は⑤ということになる。

ちなみに、「はるかなり・静かなり」など「にかなり」となる語はナリ活用形容動詞であるので、bの「しめやかに」も形容動詞「しめやかなり」の連用形であると考えることができる。また、一単語として独立している「に」で、そのまま「に」と訳しても意味が通ずるものは格助詞であるので、dは格助詞であることになる。

問3 センター試験の傍線部に関する説明問題では、傍線部の直前に正解を得るための根拠が書かれていることが多く、また、登場人物の心情を問われた場合には、その人物の会話部に正解を得る根拠が書かれていることが多い。

ここでは、按察使の君の「嘆く」原因を問うているので、傍線部の直前に書かれている按察使の君の会話部に着目さえできれば、正解はあっさり出てしまう。つまり、「さもあらば…」に「宮に見つけられたらどうしよう。こんな姿を見せるのは恥ずかしい」とあり、「人もいかなる…」に「周囲の人もどういふことであろうかと見とがめるであろうか」と書かれていることが、そのまま選択肢①の内容となっているので、これが正解となる。

①以外の選択肢に書かれていることで本文にもはっきり書かれているのは、④の後半の「宮には自分の存在を隠し通さなければならない」だけである。

②の「宮への思いを捨てられない」や、④の「宮が身分を偽っていた理由をつきとめたい」などはあるが、本文のどこにも書かれていない。本文表現に沿って考えれば間違えような問題である。

問4 和歌の解釈の問題のように見えるが、実は、各選択肢で歌意を示している「」の部分ではなく、それ以外の部分が本文と合致しているかどうかを考えると正解が得られる問題。

本文全体から見て、①の「冷やかして」は、按察使の君のすることとは思えない。②は「宮仕えで気苦労が絶えない」が本文に書かれていない。④は「工夫」がおかしい。右大臣の姫君は自分で描いた菊の絵が下手だったので墨で塗りつぶしたのであって、これは何かの「工夫」とは言えない。⑤は「容色の衰えはじめた女性」を想起させる記述は、本文中にみあたらない。正解となる③は、「描いた白菊を姫君がすぐに塗りつぶしてしまった」等の表現が本文内容と完全に合致していて誤りがない。

選択肢で「」付きで示されている歌意は、各選択肢あまり差がなく書かれているので、正解を決定する根拠にはならないが、和歌の中の「置く（霜や露が降りる）・「あへず（しきらない）」・「うつる（色あせる・枯れる）」といった表現は、知っておきたい。

問5 問3の解説でも書いたが、登場人物の心情を問われた場合にはその人物の会話部に正解を得る根拠が書かれていることが多い。この設問で問われているのは姫君の心情であるから、直前の姫君の会話部「いと差し過ぎたり」が正解を得るヒントになりそうである。そして、この姫君の会話部は、「小さき童女」の会話部を受けて発せられているものであるから、童女の行為を「差し過ぎたり」と言っていることになる。ここまでの本文を見ると、右大臣の姫君は絵を描いたりして遊んでいたことを兵部卿の宮に隠そうとしているわけだから、宮に対してそれをばらしてしまった童女の行為は、姫君にしてみれば「出過ぎた行為」であるということになるだろう。つまり、「差し過ぎたり」は、童女に対してその行為をたしなめる言葉なのである。このことが正しく説明されているのは④。よって④が正解となる。

①の「按察使の君の様子が気の毒」、②の「自分が描いた絵のつたなさを恥ずかしく思っている」、③の「自らの教育が行き届かなかった」、⑤の全体は、本文に書かれていないので、これらは正解にならない。

問6 合致問題であるから、ひたすら本文と照合して考えれば正解は得られる。

②は「侍従は、そのことを見抜いていた」以降の内容が本文にない。③は「宮の目を避けようとしていることに気づき」以降の内容が本文にない。④は「侍従から知らされた」以降の内容が本文にない。⑥は「按察使の君を気に入る」以降の内容が本文にない。

正解となる①は、前半が第一段落に、後半が第二段落のはじめの会話部に書かれていることに合致する。また、同じく正解となる⑤は、前半が本文最初と第四段落に、後半が最終段落のはじめに書かれていることに合致する。

〔総括〕

問3～問6は、問い方は違っているが、結局は本文との合致を問うている問題である。ある程度の時間を古文の解答に当てることができたならば、選択肢に紛らわしさがないので、難しくなく正解できる問題である。ただし、漢文や現代文に時間をとられて、古文を解く時間が十分にとれなかった者は、大体の雰囲気からいかにもありそうな、しかし、実は本文に書かれていない内容の選択肢にひかれて間違ってしまったことだろう。センター国語では、時間配分を十分に考えて、それを実行することが重要であることも知っておきたい。

第4問 漢文 姚元之『竹葉亭雜記』

〔書き下し文〕

吾が郷の錢明経詩賦を善くす。毎歲督学の科歳に古詩を試みるに、錢は必ず冠軍たり。一歲題は天柱の賦なり。錢場に入る時、酒を飲むこと多きに過ぎ、竟に大酔し、号に入るに輒ち酣睡す。試を同じくする者、其の試ごとに首に居るを疾み、肯て之を呼びて醒めしめず。納卷の者其の旁らを過ぐる有りて、乃ち之に告ぐ。錢始め惺然たるも、已に及ぶ無し。卒爾として題を問ひ、七言絶句一首を書す。詩に云ふ、

我揚子江頭に來りて望めば 一片の白雲数点の山

安くんぞ身を天柱の頂に置き 倒に日月の人間を走るを看るを得ん

学使卷を得て、評して云ふ「此の心胸中に幾雲夢を呑むかを知らず」と。仍りて第一に取る。

〔通釈〕

私の郷の錢明経は詩賦を作ることが得意であった。毎年、督学による科試と歳試の試験で古詩を作らせると、錢は必ず最上位の成績をおさめた。ある年の題は「天柱の賦」であった。錢は試験会場に入る時、酒を飲みすぎていて、とうとう泥酔し、部屋に入るやいなやぐすり眠ってしまった。一緒に受験していた者たちは、錢が試験のたびに首席になるのを憎んで、（錢が眠っているのを見ても）敢えて声をかけて目覚めさせてやろうとしなかった。答案を回収する試験官が錢の部屋のそばを通りかかって声をかけた。（目をさました）錢は始めぼんやりしていたが、すでに試験の残り時間がなかった。（それに気づいた錢は）いそいで試験の詩の題を尋ね、（長編の詩を作る余裕がないので）七言絶句一首を書いた。その詩は次のようである。

揚子江のほとりに来て眺めると、

ひとひらの白い雲と幾つかの山があるばかりである。
 なんとかして我が身を天柱のいただきに置いて、

太陽と月が人間界を巡ってゆくのを逆に上から眺めてみたいものだ。

試験官はその答案を見て、評して言った。「この人物の胸のうちには幾つの雲夢が広がっているであろう。(なんと氣宇壮大なことか)」と。そして(錢を)首席にしたのであった。

〔解説〕

問1 語の意味と熟語の問題。

文中の語(漢字)の意味・用法を選択肢の熟語で答える形の問題は、今までも頻出しているが、従来は、選択肢の熟語は、傍線部の漢字を含んだものであった。今回は傍線部の漢字を含んでいない熟語を並べた点に、新しい傾向が見られる。

(1)「善」は「よくす(複合サ変動詞)」と読み、「巧みにする。上手にする。心得がある」といった意味である。「能」と同義と言ってよい。この後の話の流れから見て、錢明経という人物は詩作が巧みであったことは明らかであるから、正解は②「特技」であろうが、動詞がほしい位置で、①「絶賛」・③「博覧」・④「愛好」・⑤「多作」が動詞にできるにもかかわらず、正解の②が動詞にできない点はやや不満が残る。

(2)「疾」は「にくみ(マ行四段・連用形)」と読む。字義としては①「病氣」(やまい・やむ)・②「迅速」(はやい)・③「苦痛」(くるしむ・なやむ)の可能性もあるが、「試を同じくする者」が「其の(〓錢が)試ごと(〓冠軍〓成績最上位者)に居るを」に続けるにはそぐわない。また、単に文脈だけを考えれば、④の「閉口」も入らなくはないだろうが、直後の傍線部Aから見て、もう少し悪意があると考えるべきであろう。正解は⑤「憎悪」。

問2 語の読み方の問題。

読みの問題は二〇〇三年度の追試験以降必出であるが、例年は二カ所の読み方を、それぞれの①～⑤の選択肢から選ぶ形だったのが、今回は三カ所の読み方の組合せの正しいものを一つ選ぶ形になった。

(ア)「竟」は「遂(二〇〇六年度既出)・終・卒」と同じで「つひに」。「すでに」は「既・已」である。

(イ)「乃」は「則・即・便・輒(二〇〇四年度追試験既出)」などと同じで「すなはち」。「なほ」は「猶・尚」である。傍線部Dで「よりて」と読んでいる「仍」も「なほ」と読むことがある。

(ウ)「安」は①・④・⑤のように「いづくんぞ」とも、②・③のように「いづくにか」とも読むが、「いづくにか…ん」だと「どこに…だろうか、いやどこにも…ない」という反語形になって、問6でわかるようになっていて、絶句の第三句・第四句の解釈にあてはまらない。また、三カ所のうち最もわ

かりやすいイ)の「乃(すなはち)」ができれば、ウ)の①・④はいずれも「いづくんぞ」であるから、ポイントはア)「竟」の正否ということになる。

正解は①。

問3 傍線部の返り点の付け方と書き下し文、および解釈の組合せの問題。

返り点の付け方と書き下し文(読み方)の組合せの問題は、以前非常によく出ていたものが、二〇〇五年度・二〇〇六年度と出なくなっていたのであるが、久々に復活した。さらに(ii)で解釈もセットになっている。解釈もセットのケースでは、文脈上どの意味が最もよくあてはまるかを考えて、そこから逆に読み方をさぐるという順序でもよい。

この場面は、泥酔して試験場で眠ってしまった銭明経に対して、毎回首席になる彼を「疾」んでいた受験生たちがどうしたのか、というところである。この傍線部のあと、試験官が声をかけて目がさめてぼんやりする、という流れがあるから、受験生たちはこのまま眠っていてもおうとして、わざと起こさなかったのであろう。

(ii)は③の意味がほしいところである。①は「目覚めさせた」、②は「声をかけて起こそうとした」が間違っているし、④・⑤はいずれも「使いの者」が何者であるのか不明である。そのような人物は登場しない。

(i)のほうも、①・③の「之の使ひ」が同様の理由で間違いである。「使」は②・④・⑤のように使役の「しむ」である。

ところで、この形の問題では、上段の返り点は下段の読み方どおりになっていることがふつうで、その点をチェックしても時間のむだである。もちろん、厳密にはそのような返り方がアリなのかどうか(たとえば、②のように読むには「呼_レ之(而)不_レ肯_レ使_レ醒」という語順でなければならぬから、返り方としても本当は間違いである)というようなことはあるのだが、そこまでは受験レベルでは厳しいであろう。であるから、ポイントは読み方の正否と、そう読んだときの意味である。

②は「銭に声をかけたが目覚めさせることを承知しなかった」。「肯_不ず」は「承知する。賛成する」意の重要語である。声はかけていない。

④は「あえて声をかけず、行って目覚めさせた」。目覚めさせてもいない。

⑤は「あえて銭に声をかけて目覚めさせなかった」。これが(ii)の③と合致する。

正解は(i)が⑤、(ii)が③である。

問4 傍線部の前後の状況の説明の問題。

傍線部の前は「銭始め^{ぼうぜん}當然たるも」、ここには(注10)がある。(注10)の「ぼんやりすること」だけを考えれば、②の「事態が飲み込めなかった」、④の「気が動転した」、⑤の「意識が朦朧としていた」に近いように思われるが、決めかねる。

傍線部B「已に及ぶ無し」そのものは、「すでに及ばない」もう時間がない」ということであり、③が合致している。

傍線部の後の「卒爾として」は(注)がつけてないが、「にわかに。だしぬけに」という意味。③の「いそいで」、④の「あわてて」が合致する。場面を考えても、うっかり眠ってしまったのが、目がさめてもう時間がなければ、「いそいで」か「あわてて」が適切で、①「ひとまず」、②「落ち着いて」、⑤「強引に」はあてはまらない。③か④が適当と思われる。しかし、④は「解答用紙を取り戻すことはできないので」に明らかにキズがある。解答用紙を集められてしまったとは書いていないし、それでは「絶句一首を書」くこともできなくなる。正解は③。

問5 漢詩のきまり「押韻」の問題。

散文の中に漢詩があつて、漢詩のきまりを問う問題は、二〇〇三年度以来である。漢詩のきまりの出題はほとんど押韻(偶数句末の空欄補充問題)である。

漢詩では、偶数句の末尾の字は必ず押韻する。母音のひびきをそろえると言えはわかりやすいかもしれない。七言の詩では第一句末も押韻する。

この詩は七言絶句(一句が七文字で、四句で構成)であるから、第一句末の「望」も、空欄になっている第二句末、第四句末の「間」とともに押韻するはずであるが、「ボウ(bou)」と「カン(kan)」ではどう見ても同じひびきではない。こういうケースは「韻のふみおとし」と言う。偶数句末は「ふみおとし」は絶対にならないので、この場合空欄に入る字は、「望」と同じ「オウ」のひびきではなく、「間」と同じ「アン」のひびきでなくてはならない。そこで、選択肢の語を読んでもみると、①「淡」は「タン(tan)」、②「楼」は「ロウ(rou)」、③「雨」は「ウ(e)」、④「山」は「サン(san)」、⑤「鳥」は「チョウ(chou)」であるから、「アン」のひびきになるのは①「淡」か、④「山」である。

あとは(b)の解釈のどちらがいいかであるが、これは「一片の白雲」だけをとりても④であろう。①は「白い雲の切れ間」にも、「淡」を入れたと考えた場合の「数本の淡い光」にも無理がある。正解は④。

問6 傍線部の理由説明の問題。

選択肢のキズを探して消去していけばいいのであるが、ポイントは実は七言絶句の第三句・第四句の「安くんぞ身を天柱の頂に置き、倒に日月の人間を走るを見るを得ん」の解釈である。ここはなかなか難しい。というのは、「安くんぞ…ん」なのだから、ふつうに受験レベルの句法の勉強からすると反語形で、「どうして…だろうか、いや…ない」と訳すのであるが、「安くんぞ…を得ん」には「なんとかして…したいものだ」と詠嘆的な願望として訳すケースがあり、ここはその後者に該当しているからである。「なんとかして我が身を天柱のいただき(てっぺん)に置いて、太陽と月が人間の世界を巡ってゆくのをさかさまに見たいものだ」という意味になる。

①は詩句の解釈「太陽や月を背にしながら人間界まで駆けおりたい」も違うが、「不満はあったが」もキズ。本文にそう思ったという根拠がない。

②はやはり詩の解釈の中の「逆方向に運行するのを」が間違い。常識的にもありえないことである。

③が正解。この選択肢の「気宇壮大」が、学使の言葉「此の人胸中に幾雲夢を呑むかを知らず」にあたっている。

④は詩の解釈の中の「逆立ちしながら」と、「あえて提出」が間違い。「やむをえず提出」なり「仕方なく提出」であって、「あえて」ではない。

⑤は詩の解釈の中の「太陽や月が人間界を走る」と「見上げたい」が間違い。天柱の「先端」は「先端」でも下のほうではなく「頂」に立つのであるから「見おろす」のである。「気にしない大らかな性格」も間違いである。